

家庭における子どもの心理発達と 読書環境についての一考察

An Analysis of Child Development and Reading Environment at Home

谷 川 賀 苗
Kanae Tanigawa

1. はじめに

ヴィクター・ワトソン&モラグ・スタイルズは、幼稚園や保育所に実際に足を運び、子どもたちと対話を通して絵本を一緒に読むというプロジェクトをまとめた書物において、幼子が絵本に惹かれる魅力について、次のように語っている。

“絵本とは、風変わりで不思議なものです。とても美しいものにもなり得るし、それ自体が芸術作品や高い技術をもったブックデザイン作品ともなります。また、ドキドキするほど新鮮な印刷や複製の技術を示すこともあります。こうしたものがみな、大いに大人の関心をひきます。ところが、絵本には、もう一つの驚くべき力があります。それは、まだ読み書きできない幼い子どもたちに語りかけて笑わせたり、ひきこんでお話に関心を持たせたり、言葉への愛着をふくらませたり、文学の中に誘ったりする力です。絵本とは、ありえないことをなしとげるもの、いわば、大いなる単純さと大いなる複雑さとを結びつけるものなのです” (ワトソンら、2002)。とりわけ、幼子にとっての絵本は、絵本の世界で遊ぶ楽しさの種が散りばめられている宝物のようなものと述べている。

国の施策においては、平成十三年年十二月に、「子どもの読書活動の推進に関する法律」を公布・施行し、子どもの読書活動の推進に関し、基本理念を定め、国及び地方公共団体の責務等を明らかにするとともに、施策を総合的かつ計画的に推進することとした。そして、平成十四年八月には、この法律の規定に基づき、「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を閣議決定し、平成十四年度から平成十八年度までのおおむね五年間にわたる施策の基本的方向と具体的な方策を明らかにしている。

絵本市場について、グレード(対象年齢・学年)別、出版点数を調べた調査によると、1980年は、全体で1468冊のうち23%が幼児であった。そして、年を追うごとに、幼児向け出版物の比率が増加し、2002年では、紹介された1881冊のうち36%が幼児むけのものであった。この割合の増加から、子どもの本の中でも、絵本の方に出版がシフトしてきていることが明らかに見えてくる。

このような絵本の出版の増加の要因としては、乳幼児を対象として読み聞かせをするというブックスタートという運動が各自治体レベルで実施されているということ、この運動を呼応するかたちで図書館や書店も絵本に対してニーズを高めているということが考えられる。

一方、メディアや高度情報通信技術の急速な変化・発展により、活字・本を読むという行為は、子どもの生活の中であまり大きな位置をしめていないことが各種の読書調査の結果明らかになっている（毎日新聞社、2006；栃木県教育委員会、2004）。必要な知識・情報を入手するため、携帯電話やインターネットなど多種多様なメディアが、子どもを取り巻く生活空間にも溢れている。このような社会の情報化の中で、読書、文字を読み解くという自発的な行為は、子どもにとってしんどいと意識されている。

情報や知識の入手が多様化している今日の子どものとりまく社会環境において、子どもが絵本を読むことはどのような意味があるか。長い歴史をもつ絵本と子どもの心の発達の関係に、近年の多種多様なメディアはどのように影響するのだろうか。子どもを取り巻く社会の変化、遊びの質的な変化が引き起こっている現代において、絵本という文化財が、子どものこころの発達や人間関係を紡ぐことにおいてどのような影響を与えうるものなのか。本研究では、子どもにとっての絵本について、子どもが一日のうちで一番長く時間を過ごす家庭において、どのように絵本と接しているかという家庭の絵本環境をとりあげる。

佐々木（1998）は、親と子の心理的なつながりと絵本について、とりわけ幼児にとっては、大人による絵本の読み聞かせは、子どもと絵本が出会うきっかけを作り、絵本を肉声で語りかけることによって、子どもは言葉と出会うと述べている。また、保育園の延長という立場で、絵本を子どもたちに紹介する読み聞かせの実践を長年行っている徳永（2004）は、絵本の読み聞かせを通して、子どものことばの発達が見えると報告している。読み聞かせの実践を通して、子どもは生まれた時から知的欲求をもっているということ、そして、その欲求を満たしてくれる大人が大好きだと生後7ヶ月から5歳児の読み聞かせの場面を紹介しながら力説する。

2. 家庭における絵本環境

幼子は、まわりの大人に絵本を読んでもらうことによって絵本と出会う。そして、子どもは、絵本を読んでもらって楽しいと感じる経験を重ね、言葉と出会い、読み手の大人と絵本を一緒に読むという時間を共に過ごすことによって、人間的な心の触れ合いを感じる。

子どもが成長する過程において、絵本に親しみ、絵本を楽しんでいる子どもがいる一方で、あまり絵本に関心を示さない子どももいる。子どもの成長は、一日の大半を過ごす家庭の影響を強く受けている。おそらく子どもが絵本と出会うということについても、この家庭環境が大きく影響していると考えられる。

定期的に絵本を購入する、あるいは図書館で貸し出しする家庭もあるが、子どもはその絵本と

どのように具体的に接しているのだろうか。一人でページをめくり、お気に入りの絵とお話するのだろうか。夕食までの時間や、眠りにつく前の時間、絵本をまわりの大人と一緒に読んでいるのだろうか。本研究では、就学前の子どもが絵本と出会うことについて、家庭がどのような役割りを果たしているのか調査を実施し、絵本を与える親の意識も含めて回答を求めた。

3. 家庭における子どもと絵本の調査

①実施方法

*調査対象～大阪市鶴見区 M 保育園 全園児対象 (110名)

*調査実施期間～2006年7月28日～8月6日

*調査方法～質問紙調査法

上記の調査実施期間は、M 保育園の一学期個人面接の期間であった。

調査の意義を直接保護者に伝えることにより、調査実施に理解と協力を求めるために、各クラスの保育担当先生が面接時に調査用紙を保護者に手渡し、後日クラスに持参してもらうという方法をとった。

*回収率 57名の保護者から協力が得られた (回収率51.8%)

アンケートの回答者は全員母親であった

子どもの年齢別回答件数	零歳児クラス	2名
	一歳児クラス	12名
	二歳児クラス	10名
	三歳児クラス	13名
	四歳児クラス	12名
	五歳児クラス	8名
	合計	57名

②調査の目的

子どもが絵本と出会うことについて、まわりの大人の関わりが大きい。子どもが絵本を一人で選べたとしても、それを近くにいる大人が子どもに読むという働きかけがないと絵本としての機能を果たさない。さらに、絵本を文字どおり子どもに読むか、絵本に描かれている「絵」により注目する時間を過ごすか、目の前の絵本に反応する子どもの語りに重点をおいて絵本を読み進めるか、絵本を子どもに読む行為には多様で柔軟な働きかけが含まれている。では、このような多様さを含む子どもと絵本について、家庭がどのような役割りを果たしているのか、家庭の絵本環境について子どもをとりまく空間を理解することを目的とした。

4. 調査項目別集計および結果について

①『子どもは絵本が好きか?』

は い・・・55名

いいえ・・・2名

全体の約9割強の母親が、自分の子どもは絵本好きだと回答した。

何故、子どもが絵本を好きと考えるのか、また嫌いを考えるかについて、自由記述の方式で回答を求めた。子どもの絵本との関わりについて、常に身近にいるものが、その子ども行動を観察できる。子どもと絵本の関係についても、多面的に捉えることができると考えられる。

表1、表2は、子どもが絵本を好きと考えられる理由/子供が絵本を好きと考えられない理由を、保護者の視点から自由に挙げてもらった。各回答を、年齢別にまとめたものが、下記の表である。記述内容が明らかに同じ内容のものについては(名)とした。自由記述のため、回答者によっては、複数の内容が挙げられているもののあれば、全く内容の記述がないものもあった。したがって、リストされた理由の合計は、回答者の数と必ずしも一致しない。

表1 「子どもが絵本を好きだという理由」

<年 齢>	<理 由>
零歳児：	*まだ、10ヶ月なので内容は分かっていないのですが、動物や食べ物などの絵を見、楽しそうにしているの。 *遊ぶ時、自ら絵本のボックスにすぐ向かって行き、いろいろ絵本を開いている
一才児：	*絵本を自分でめくり、絵本の絵を見ながら「あー、あー」と発語があるため *毎日、本棚から一人で本を出し、読んでいるの *普段は落ち着きがないが、自分で本を選んで大人に読んで欲しいと伝えてくるから *気に入った絵本を両手で持ってきては、「読んで」というような手振りをする *本を広げるとその場に座り込む *自分から絵本を持ってきて、読んで欲しいと催促するから (2名) *絵本を見て、指をさして何か独り言を言っている *家で遊んでいる時、本棚から絵本を引っ張り出してべらべらめくって楽しんでいるから *毎日、自分から絵本を棚から出してきて、私(母親)に「読んで」とせがみ、ひざの上に座ってくる。 *読み手(母親)が絵本を読み出さずにいると、顔を見上げて鼻を鳴らしてせかす *絵本を大人が読んであげると喜ぶ *本棚に目をやったとたんに、「読んで」と本を持って私に渡し、膝にちょこんと座っておとなしく本に目をやっている
二歳児：	*毎日、絵本を開いてみると、読んでと言ってくる *毎日、何冊かは絵本を読んでいる *自分から「絵本読んで」と大人に持ってくることが多い (3名) *私(母親)が絵本を持ってくると、とても喜び、静かに聴いているから *気に入った絵本を何度も読んで欲しいとせがむ (3名) *一人でもよくページをめくり、絵本を読んでいる *兄が読んでもらっている時に横で聞いてたり、保育園で先生に絵本を読んでもらっているの *毎晩、寝る前に絵本を読んでいるが、自分で本を選んでるときが生き生きしている *同じ絵本を繰り返し読むので、絵本の内容を暗記している

続 表1 「子どもが絵本を好きだという理由」

<年 齢>	<理 由>
三歳児：	<ul style="list-style-type: none"> * 毎日のように、絵本を読んでもリクエストされる（5名） * 絵本の話をよくする * 子ども一人でも絵本を広げて見ていることが多い（3名） * 絵本を読んだ後に内容を覚えているようで、自分でもその内容を読んだりする * 寝る前に必ず絵本を読むのが習慣になっていて、省こうとすると「絵本は？」とリクエストされる * 「絵本を読もうか」と大人が言うと嬉しそうだから * ぐずっていても、「絵本をよんであげよう」と言うとお機嫌がよくなる * よくひとりでも声に出して、絵本を読んだりしている * 絵本を遊びの一つのように、熱心に見ているから * お気に入りの絵本を本棚から取り出し、「読んで」と持ってくるから
四歳児：	<ul style="list-style-type: none"> * 自分に興味がある絵本であれば、一人で読んで（ながめて）いるから * 自分ひとりでは分からないものは、まわりの大人に「読んで」という * 会話に、絵本の中にある言葉が出てくる時がある * 寝る前にいつも絵本を読んで欲しいと言われるから * 絵本を集中して聞くことができるから * 本屋へ出かけると、たくさんの本を買って欲しいと望むから * よく絵本を読んでもと言われるから（2名） * 「絵本を読むよ」と声かけすると、遊ぶことをやめてそばに来るから * 毎日、絵本を見ているから * お気に入りの絵本は何度も繰り返して読んでいるので、内容を覚えている * 買って欲しいリストの中には、必ず絵本が入っている * 絵本がある場所では、いつも絵本を読んでいる * 最近、字を覚えてきたので自分で絵本をひろげて読んでいる * 本屋さんに行くことや、図書館に行くことを好む
五歳児：	<ul style="list-style-type: none"> * 必ず一日一回は、絵本を読んでもお願いされるから * 一人でも絵本を読んでいるから * 何度も繰り返し同じ本でも見て喜んでいるから * ひらがなが読めず絵本の内容は読みとることはできないが、絵本の絵を見ながら自分でオリジナルストーリーを周りの大人に話してくれるから * 非現実的だから * 毎日のように開いて見ている * 一冊絵本を読んでもあげると「次これ読んで」と次々に持ってくる * 「絵本読んで」と周りの大人に頼んでくる（2名） * お気に入りの絵本を何度も読んで欲しいと言う * 家にいる時、自分ひとりで大きな声を出して絵本を読んでいる（3名） * 本屋へ行くと、必ず新しい本を買いたいとねだる

表1に示されたように、周りにいる大人の観察において、子どもが絵本を好きと考えられる理由には、様々な内容があることがわかった。年齢別に分類すると、それぞれの年齢グループの特徴が明らかにでている。ほとんど絵本に描かれている絵の理解にとどまる零歳から三歳ぐらいまでのグループでは、一人でもお気に入りの絵本を出して、絵本を眺めること、また、発語をしていることが理由に挙げられた。また、ひらがなが読めるようになりだした、四～五歳のグループでは、一人で声に出して絵本を楽しんでいる様子が伺えた。子どもが絵本を好きという行動に、発達年齢により特徴ある行動が指摘される一方で、年齢に関係なく共通する読書行動も見られた。

すなわち、子どもは、年齢に関係なく、近くにいる大人に絵本を読んでもらうことが大好きであるということである。お気に入りの絵本を、周りの大人に読んで欲しいと積極的に働きか出ている様子は、発達年齢に関わりなく、絵本の好きな子どもたちの行動として見られた。

表2 「子どもが絵本を好きではないと考えられる理由」

<年 齢>	<理 由>
四歳児：	<ul style="list-style-type: none"> * 赤ちゃんの頃にあまり読み聞かせをしていなかったの、興味を示さない * 嫌いと言うわけではないが、あまり自分から進んで絵本を読んでは言わない。 * すこし長い話になると、最後まで聞くことが出来ない場合がある * お気に入りの絵本がない

本調査では、全体のなかで、ごくわずか（2名）であるが、周りの大人の観察から、子どもが絵本についてあまり関心を示していないということが報告された。その理由についてまとめたものが表2である。親として、子どもが絵本にあまり関心を示さない理由について、赤ちゃんの頃の読み聞かせが十分出なかったことを挙げられる保護者や、お気に入りの絵本が四歳になってもないことが、絵本をあまり好きではないという理由を挙げられる保護者おられた。

②『家庭での絵本を読み聞かせる環境について』

(1)「家庭において、主として子どもは誰と一緒に絵本を読んでいるか」

主として母親	32人
母親か父親のどちらか	16人
母親か祖母のどちらか	2人
主として祖母	1人
主として父親	3人
母親かお姉ちゃんのいずれか	1人
父親かおばあちゃんのいずれか	1人
母親か祖母か父親のいずれか	1人

家庭において、主として子どもが絵本を一緒に読んでもらえる大人は母親であった。この結果は、本研究に協力していただいたM保育園の所在地の特色が顕われている。この保育園が所在しているT区は、近年工場の跡地などにマンションが続々と建築されている。昔からの町並みが残る一方で、このような住宅開発により核家族の区内への流入が増加している。核家族において、夫が主として家計の担い手で長時間の労働に携わっている場合、母親が子どもと過ごす時間が長くなる。子どもと一緒に絵本を読む大人も、主に母親になるのであろう。次にとりあげる『絵本を子どもに読み聞かせる時間帯』とも関連するが、子どもに絵本を読んであげるのは、父親か母親のいずれかという回答も全体の約3割（16人）あった。必ずしも子どもと関わる時間が長くな

い父親も、子どもが眠りにつく前の時間や、休日に絵本を一緒に読むことで子どもと関わっている実態が明らかになった。

(2) 『絵本を子どもに読んである時間帯はいつ頃か』

寝る前	27人
夕食前	8人
夕食後	4人
18時～21時	17人
平日 20時ごろと休日の午前中	1人

子どもと絵本を読む時間帯は、保育園のお迎え後から夕食の前、夕食後、寝る前であった。自由記述により回答を求めた結果、記述の内容には、一日のスケジュールについて欠かれていますものや、具体的に時間帯が記入されているものがあつた。記述の内容から、保育園から帰宅し、夕食をとり、子どもが眠るまでの必ずしも長いとはいえない時間帯のなかで、子どもは大人と一緒に絵本を楽しむ時間を過ごしている様相が伺えた。

(3) 『絵本を子どもに読んであげるのはどのくらいの時間か』

5分	1人
5分から10分	2人
10分	8人
10分から20分	1人
10分から30分	3人
10分から60分	1人
15分	10人
15分から20分	4人
15分から30分	1人
20分	7人
20分から30分	5人
30分	9人
60分	1人
時間としては決まっていなうが、一冊をよみあげるまで	1人
特に決まっていなう	1人
無回答	2人
合計	57人

子どもと一緒に絵本を読む時間の長さについて、自由記述での回答を求めた。一日の中で絵本を読む時間の長さは、5分から60分の中でヴァリエーションが見られた。また、回答の中には、特に決まった時間の長さで絵本を読むよりはむしろ、一冊の本をとにかく読むという家庭もあった。今回の結果は、親が子どもにどのくらいの時間、絵本などの本を読んであげるのか望ましいかと子育て中の親たちがもつ質問に対して、一つの答えを提示している。すなわち、大人が子どもと絵本を読むことについては、一般論はなく、各家庭の状況と取り上げる絵本そのものの内容を踏まえて、それぞれの家庭で決められることが望ましいということである。

(4) 『絵本を読んであげる状況』

大人と子どもと一緒に絵本を読む状況について、具体的な場面を四種類取り上げ、各状況が当てはまるかについて尋ねた。状況は、「絵本の中の文章をそのまま読む」、「子どもにわかるように文章を読み替える」「絵を中心に子どもがお話をするのを聞いてあげる」の四場面である。表3は、各状況について、年齢別に分類し、まとめたものである。

表3 大人と子どもが絵本と一緒に読む状況

(n. s. は無回答の人数)

1) 絵本の中の文章をそのまま読む							
零歳児	は	い	1名	いいえ	0名	どちらともいえない	1名
一歳児			6名		3名		3名
二歳児			5名		3名		2名
三歳児 (ns 1名)			4名		6名		2名
四歳児 (ns 1名)			8名		2名		1名
五歳児			5名		1名		2名
2) こどもにわかるように文章を読み替える							
零歳児	は	い	1名	いいえ	0名	どちらともいえない	1名
一歳児 (ns 1名)			5名		1名		4名
二歳児			5名		2名		3名
三歳児			9名		3名		1名
四歳児			2名		6名		4名
五歳児			3名		4名		1名
3) 絵を中心に子どもがお話をするのを聞いてあげる							
零歳児	は	い	1名	いいえ	1名	どちらともいえない	0名
一歳児 (ns 1名)			5名		2名		4名
二歳児			3名		2名		5名
三歳児 (ns 1名)			5名		3名		4名
四歳児 (ns 1名)			7名		1名		3名
五歳児			5名		1名		2名
4) 子どもと各ページ話し合いながら							
零歳児	は	い	1名	いいえ	1名	どちらともいえない	0名
一歳児 (ns 1名)			7名		1名		3名
二歳児			6名		2名		2名
三歳児 (ns 1名)			8名		2名		2名
四歳児			5名		3名		4名
五歳児			4名		1名		3名

大人と子どもと一緒に絵本を読む風景について尋ねた一連の質問から、いくつかの興味深いことが分かった。まず、大人と子どもが絵本を読む状況において、大人は子どもの絵本理解の様子を見て、工夫をしていると言うことである。発達年齢が高いということで、絵本のメッセージが子どもの心にしっかりと届いているとは限らない。絵本と一緒に読むことで、傍にいる大人は子どもに絵本の内容を届けるために努めている様子が伺えた。また、子どもにとって、絵本とは内容を読んでもらったり、絵を楽しむものだけではなく、子ども自身がその絵本からさらに新しいお話の世界を作り出すことを刺激材料にもなりえることが分かった。大人に読んでもらったことから感じたことを子どもは自分の内部に取り入れ、新しいものを創造しそれを傍にいる大人に聞いてもらうことでことばの広がりや奥域を養っていくのであろう。

(5) 『子どもが好きな本のタイトル』

子どもたちは、どんな絵本がお気に入りなのだろうか。家庭で、子どもが好んで読む絵本について、それらのタイトルを自由記述方式で答えてもらった。タイトルが重なって挙げられた場合は、() 名とした。また、この質問に回答されなかったものの件数は、n. s. () 名とした。

表4 年齢別 子どもが好きな絵本のタイトル

<年 齢>	<絵本のタイトル>	<年 齢>	<絵本のタイトル>
零歳児	メイシーちゃんシリーズ ほく、れんらくせんにのったんだよ 眠れる森の美女	二歳児	どんぐりころちゃん、こっこちゃん 子ぐまちゃんシリーズ きんぎょどこいった ピンポンパス ねないこはだれだ アンパンマンの本 こぐまちゃんのうんてんしゅ いないいないばあ 絵本名作シリーズの金太郎 はらべこあおむし 14ひきのあさごはん 14ひきのひっこし のりものあれあれ絵本 からすのパンやさん えんそくパス ころちゃんはだんごむし ノントンシリーズ 乗り物図鑑 「ふう」 保育園からもってかえった絵本(タイトルは明記なし) n. s. (1名)
一歳児	こどものとも0・1・2 マミィ どんなおと あっぷっぷ へんしんトンネル びんちゃんえほん アンパンマンのときゅうれっしゃ おおきいちいさい がちゃがちゃどんどん おしっこおしっこ こぐまちゃんおはよう いないいないばあ ばんばんばんだ ブルーナーの0才から5才の本 がたんごろん がたんごとん あかちゃんの絵本 特にお気に入りの絵本はない(2名) n. s. (2名)		

続 表4 年齢別 子どもが好きな絵本のタイトル

<年 齢>	<絵本のタイトル>	<年 齢>	<絵本のタイトル>
三歳児	そらまめくんのペット はんしろう 3びきの子ぶた アンパンマンシリーズ ぐりとぐら (2名) はらぺこあおむし くるまやでんしゃの本 サンチャイルド 「ぼくはくわがたむし」 サンチャイルド 「はるのいきものどーこだ」 びっくりおばけ だめだめデイズ だめよデービット のんたんシリーズ (2名) しろくまちゃんのホットケーキ きんぎょがにげた おやすみなさいおつきさま Good night ゴリラ アンパンマンの本 アリとキリギリス (かみしばい) ぴんちゃんえほん ぜんまいざむらい ぼちぼちいこか こぐまちゃんシリーズ よるくま 11びきのねこ てぶくろ からすのパンやさん 特にお気に入りの絵本はなし ぼくはおつきさまがほしいんだ いやいやえん n. s. (1名)	四歳児	赤いくつ リトルマーメイド だめよデービット せなけいこのお化けシリーズ のんたんシリーズ シンデレラ ふしぎな国のアリス からすのパンやさん 保育園から持ち帰った本 (タイトル特に明記なし) きかんしゃトーマス大図鑑 サンチャイルド 「はるのいきものどーこだ」 3びきのこぶた ジャックと豆の木 ノントンボールまてまえて しゅくだい 11びきのねこ トリゴラス バムとケロの空のたび ひかりのくに (3歳児クラスで定期購読したもの) いないいないばあ しりとしましよ n. s. (2名)
		五歳児	にじいろのさかな バムとケロシリーズ ねこのばんごはん もりのおきやくさん はれときどきたこ いやいやえん 森の自転車やさん ふうせんくじら おいしゃさんなんかこわくない マルミル日和 美女と野獣 おはなし絵本 パオちゃんのかいすいよく 特にお気に入りの絵本なし (その時の気分で選ぶ) n. s. (1名)

子どものお気に入りの絵本を、年齢別に分類したのが、表4である。お気に入りの絵本が複数リストされていた場合も含め、多種多様に絵本が挙げられた。個々の子どもにお気に入りの絵本があることは、子どもの個性と関係するのであろうか。子どもが絵本に出会うこと、そのお気に入りの絵本は、子どもの心の発達とどのように関連づけられるのだろうか。子どもは、お気に入りの絵本の中に何を見ているのか。繰り返し繰り返し何度も同じ絵本読む行為の中に、子どもはどのような意味を見出しているのだろうか。子どもがどのように絵本を味わい、自己との関連をもって解釈しているかについて、分析検討することは今後の課題である。

(6) 『絵本を購入する際に、最も重視する点はどのようなことか』

子どもに買い求める絵本は、どのような基準で選ばれるのだろうか。保護者に対して、絵本を購入する基準を最も重視する、第2に重視する、第3に重視するという3段階で内容は自由記述方式で尋ねた。ここでは、最も重要視することについて挙げられたものをとりあげた。自由記述の内容が明らかに同じ意味合いの場合は、()名としてまとめた。

表5 年齢別 絵本を購入する際に、最も重要視する点

<年 齢>	<最も重要視すること>
零歳児	絵の色彩 子どもが関心を示しているかということ
一歳児	子どもが関心をしめしているかということ (3名) イラスト・絵 (5名) 子どもにわかりやすい内容かということ (3名) n. s. (1名)
二歳児	子どもにわかりやすい内容かということ (2名) 絵 (2名) 子どもが関心をしめしているかということ (3名) n. s. (3名)
三歳児	内容 (5名) 絵 子どもが関心をしめしているかということ (3名) 雑誌に絵本の内容が掲載されていた本 一緒に読む大人も楽しめるかということ 表現がやさしいもの n. s.
四歳児	字が読みやすいか 子どもが関心をしめしているかということ (6名) 内容 (4名) 年齢に合った本かということ
五歳児	子どもが関心をしめしているかということ (4名) 内容 (3名)

表5は、年齢別に保護者がどのような基準で子どもに買い与える絵本を選んでいるかについてまとめたが、全体で見ると、「子どもがその絵本に関心を示しているか」20名、「絵本の内容が子どもに合っているか」15名という二つの基準が、全体の約三分の二を占めていた。さまざまなテーマでたくさんの絵本が出版されている中で、子どもにとっての絵本を考える場合、それぞれ個々の子どもの身近にいる大人が子どもの発達に応じて絵本を与えることの大切さが示唆された。このことは、日々発達してゆく子どもを見つめている大人が、絵本を選ぶ際にもつ疑問や、相談できる絵本アドバイザーがいるとより一層子どもの絵本の世界も広がるであろうと考えられる。

(7) 『家庭で子どもが一人で絵本を見る場合の様子について』

家庭において、子どもが一人で絵本を見る様子はどのようなものであろうか。子どもが絵本と出会う風景を、家庭にいるようすから考えるために、いくつかの状況をあらかじめ設定し、それらの状況のうち最も当てはまるものについて一つ選択してもらうという回答方式を用いて、設問された。挙げられた状況は、1) 一人で絵や文字を見ている、2) 絵をみて思いつくままに話している 3) 気に入ったページを何度も開く 4) 一人でみるよりも、どちらかという、まわりにいる大人に読んでほしいと頼むの4つである。表6は、家庭で子どもが一人で絵本を見る場合の4つの状況うち選ばれた各状況について分類したものである。() は回答者の人数を示すものである。

表6 家庭で子どもが一人で絵本を見る場合の様子について

零歳児	一人で絵や文字を見ている	(一名)
	気に入ったページを何度も開く	(一名)
一歳児	一人で絵や文字を見ている	(二名)
	絵を見て思いつくままに話している	(一名)
	気に入ったページを何度も開く	(三名)
	一人でみるよりも、どちらかという、周りにいる大人に読んで欲しいと頼む	(六名)
二歳児	一人で絵や文字を見ている	(二名)
	絵を見て思いつくままに話している	(三名)
	気に入ったページを何度も開く	(一名)
	一人でみるよりも、どちらかという、周りにいる大人に読んで欲しいと頼む	(三名)
	n. s.	(一名)
三歳児	一人で絵や文字を見ている	(二名)
	絵を見て思いつくままに話している	(八名)
	気に入ったページを何度も開く	(一名)
	一人でみるよりも、どちらかという、周りにいる大人に読んで欲しいと頼む	(二名)

続 表6 家庭で子どもが一人で絵本を見る場合の様子について

四歳児	一人で絵や文字を見ている	(五名)
	絵を見て思いつくままに話している	(五名)
	気に入ったページを何度も開く	(三名)
	一人でみるよりも、どちらかごとく、 周りにいる大人に読んで欲しいと頼む	(七名)
	n. s.	(二名)
五歳児	一人で絵や文字を見ている	(三名)
	絵を見て思いつくままに話している	(三名)
	気に入ったページを何度も開く	
	一人でみるよりも、どちらかごとく、 周りにいる大人に読んで欲しいと頼む	(一名)
	n. s.	(一名)

子どもにとって、絵本とはどのようなものだろうかということについて、子どもが家庭で一人で絵本を読んでいる様子から考えるためこの設問を設けた。文字についてまだ出会っていない幼児にはどのように絵本と接しているのか。発達に応じて文字にも関心を示しはじめた子どもは絵本とどのように出会うのか。表6は、家庭において、子どもが絵本と一人で接しているようすを保護者に尋ねたものを、年齢別に分類したものである。

今回の調査が57名という人数に限られていること、また年齢別にこの人数を分けることによって、年齢グループには人数配分に散らばり見られことから全体の傾向を見ることは難しい。しかし、この結果を今後の研究課題と重ねて考えてみると次のような点が興味深いと思われる。発達年齢が高くなることと、絵本をどのように読むかについて特に目立った傾向が見られない。例えば、二歳児グループにおいて、一人で絵や文字を楽しんでいる子どもがいたり、絵をみて思いつくままに話をする幼児もいたりするが、一方で一人で絵本を見るよりも、まわりにいる大人に読んでほしいと頼む子どももいる。このような、個々の子どもにとっての絵本との出会いのようすは、四歳児グループにおいても見られる。子どもにとって、絵本との出会いはさまざまであり、文字が必ずしも読めなくても絵本の絵に描かれたメッセージと出合うことは可能である。しかし、内容によっては、子どもは大人のサポートが必要になる。ある絵本は、子どもにとってすこし内容が難しい場合も考えられる。また、子どもはその絵本に描かれているメッセージを身近にいる大人と一緒に楽しみたいと思うかもしれない。そのような場合、身近にいる大人に対して一緒に読んで欲しいと頼むのであろう。この設問に対するさまざまな反応から、「子どもにとっての絵本」について答えがひとつでないことが明らかになった。

5. おわりに

子どもの発達を取り巻く環境は、マルチメディア時代といわれる社会である。社会の変化のなかで、読書という長い歴史をもつ文化活動にも大きな変化が現れている。このような状況の下、子どもの読書環境も少なからず社会の変貌に影響を受けている。

本研究では、「子どもにとっての絵本？」という問いについて、家庭における絵本環境の視点から検討した。子どもが一番長く時間を過ごす家庭において、子どもと絵本の関わりはどのようなものなのであろうか。家庭における子どもと絵本の接し方を実証的データで示すことにより、心理学的な視点から読書教育の方向性に新たな示唆を与えることが出来ると考えられた。

家庭において、身近な大人が子どもの絵本との観察を行った結果、次のような事柄が明らかにされた。まず、第一に、子どもは絵本が好きだということである。そして、これについての具体的な行動は、絵本を一人でもめくり、繰り返し繰り返し読んでいる、絵本のページと向き合い、一人で絵本と対話してる、ということに顕われた。文字との出会いがまだない零歳児、一才児、二歳児の幼子についても、これらの行動が観察された。このことは、子どもが絵本に何を見出しているかを問うものである。子どもが気に入って繰り返し読む絵本に、子どもの心の発達を捉えることができたり、意味づけることができる可能性があると考えられる。第二に、子どもの年齢に関わらず、子どもは身近な大人と一緒に絵本を読んだり、文字を読んでもらったりすることが好きであるということが今回の調査でも明らかになった。子どもは大好きな大人にゆっくりとていねいにお気に入りの絵本を読んでもらうことによって、心がほぐれ信頼を実感できると考えられる。絵本と一緒に読むということを通して、暖かい人間関係を子どもは感じることができ、絵本のことばや絵が子どもの心の心に焼きついていく。

今回の研究から得たれた知見を踏まえて今後の研究課題として、家庭における絵本と子どもの関わりについて、より具体的な場面を取り上げて絵本環境を問うことや、親の子どもを絵本へと導く意識についての調査が考えられる。今回実施したアンケートにおいて、家庭における絵本についての質問や、日頃、疑問に思っていることを記述する空欄を末尾に設けた。その記述内容は次のようなものであった。

『自分も本を読むのが好きなので、子どもに本を読んだりするのが好きなのですが、新しい本はどのくらいのペースで購入することがいいのでしょうか。あまり買いすぎるともの大切さがわからなくなると思います。今は、月に一冊ぐらい購入、保育園から持ち帰りが月に一冊です。で、合わせて二冊です。でも、子どもは、たくさんの本を読んで欲しくて。。。』『種類や数は豊富なほうがいいのかなと思いつつも、今ある絵本にあきていない様子もないので、あまり新しい本を購入していません。このことについて、どうかなとおもっています。』『自分では、いい本だと思いついて買ってみても、子どもは興味を持たなかったり、また一方で大人から見て訳がわからない内容の本でもすごく気に入ったり、この違いはどういったものなのかいつも疑問に思っています。』

今後の研究の広がりとしては、家庭における子どもが絵本の出会いを作っている身近な大人に対して子どもの読書環境に対する意識を尋ねることが考えられる。子どもを取り巻く社会環境の中で、子どもの読書行動については幼少期から努めて子どもに絵本や本の出会いをつくっている家庭もある。また、どのような絵本を子どもに与えることが望ましいかというような疑問も含めて、子どもの読書環境について疑問ももたれていると考えられる。子どもを読書への導く社会文化的要因としての家庭環境について、より一層の理解を深め、絵本を通して子どもの心の発達、心の揺れをとらえられ可能性を探って行きたい。

引用参考文献

佐々木宏子 新版絵本と子どものころ、Jula 出版局 1998年

徳永満理 絵本を食べて大きくなる子どもたち—子どものことばを育てる絵本— 日本児童文学
2004年 3月—4月号 Pp. 26-29.

栃木県教育委員会、平成15年小・中・高校生の読書活動に係る実態調査

毎日新聞社 読書世論調査、2006.

ワトソン、ヴィクター&スタイルズ、モラグ,子どもはどのように絵本を読むのか、柏書房、2002年

〈謝辞〉

今回の研究について、理解と惜しめない協力をしてくださったM保育園、迫佐恵子園長先生、各クラスの担任の先生、ご父兄の方々に心から感謝を申し上げます。